

虹

「虹」松澤 要氏揮毫

発行 人間能力開発研究所
 ジャパン・オフィス
 〒 651-0064 神戸市中央区大日通
 7-1-10-203
 TEL 078-251-3240
 FAX 078-251-3612

終わり無き奇跡

植村 裕



一九九七年二月、東京
 グランドパレスで長女の
 妙は人間能力開発研究所
 のプログラムを無事終
 え、卒業式をしていただ
 きました。

一九八九年（小学校二
 年の終わり）自家製のプログラムから始め、集中プログ
 ラムを経て、高校入学とともに人間能力開発研究所の全
 てのプログラムを終了しました。その間、多くの困難を
 乗り越えてきました。それは、枚挙に暇がない程です。

彼女は脳障害児（所謂脳性麻痺児）として出産しまし
 た。その後、研究所の治療（本当の意味で治療と呼べる
 ものは研究所がはじめてであったし、この病気を理性的
 に、合理的に理解させてくれたのも研究所が初めてでし
 た）を始めるまでのことは脳障害児を持つ親にとつて、
 言葉にすることが意味を持たないくらい辛い毎日に違
 いありませんでした。可能性という言葉が本当に信じら
 れるようになったのは「自分の脳障害児をどうするか」

の講義を受けてからでした。私はフィラデルフィアで受
 講したのですが、今でもその時の講義の内容細部はもち
 ろん、空の色も、風の匂いも、空気の肌に触れる感触も、
 鳥の声も全身が覚えています。私の人生の中で最も価値
 のある一週間でした。娘の困難な状況や、出口の無い焦
 燥感や、暗い将来に対する不安が、かすかな希望に、そ
 れがどんな困難を伴うにせよ、まるでパンドラの箱の中
 に潜んでいた希望のように、それがどんなにか弱くても、
 小さくても、それが存在するというだけで生きていける
 という確信を生んでくれました。娘のどんな否定的な状
 況も困難さえも、その希望は雄々しく立ち向かう目標に
 変えてくれました。

入学時、視力検査で測定不能とされた視力も、運動会
 で歩くように走ってコーナーを認識できず突き抜けて徒
 競走を終えてしまったことも、二時間前の昼食の内容も
 覚えることができない乏しい記憶力も、プッシュホンも
 押せないくらい不器用な手も、一桁の足し算もできな
 かったし、50音表の中から一つ平仮名を見付けること
 もできなかった学習障害も……

理性的な希望は何よりも大きな勇氣になりました。後
 年、多くの暖かい声援を贈ってくださった人たちが、こ
 のような質問を多くされました。曰く「妙さんは何故こ
 のような過酷な訓練を続けることができたのですか？
 訓練することを嫌がったことはありませんか？」と。そ
 の質問に対して、私ほいつもこのように答えました。

「本当に訓練は大変でした。まるで一日にフルマラソン
 を二回するくらいの運動量だと思います。何よりも分刻
 みのスケジュールを朝の六時十五分から夜の十時三分
 まで、食事とお風呂と若干の自由時間を除いて大量のプ
 ログラムをこなすのは並大抵のことではありません。そ
 して、盆や正月ですら七年の間、一度も訓練を休んだこ
 とが無かったのですから。」

しかし、彼女は一度も訓練を止めると言ったことはあ
 りません。泣きながら走っていたときも、本当のことは
 私にも分かりませんが、きつこうだと思えます。それ
 は今まで読むことができなかった子どもが読めるよう
 なった喜びは私たちには本当の意味で分からないのかも
 しれません。運動会で、一番りの子どもの後ろを大き
 く遅れて走っていた子どもが、小学校六年生のマラソン
 大会で女の子の中で一位で走って帰ってこられた喜びも
 本当には分からないかもしれません。また、デングリガ
 エルも満足にできなかった子どもが、片手側転も倒立前
 転やランドオフや後方倒立回転や、体操選手がするよう
 なスキルを美しくできるようになる喜びも私たちには本
 当には理解できないかもしれません。一秒も洗面器の中
 で息を止めることができなかった少女が、クロールで五
 キロメートルも泳げるようになった喜びは、とうてい私
 には本当の意味で分からないのかもしれない。

それほ本当の意味で奇跡だったのです。この世で過去
 に起きたどんな奇跡よりも奇跡だったのです。
 何故ならば、彼女自身に起こったことだからです。私
 の目の前で起こったことですから。そして、それは最後
 に起きたことではなくて、繰り返し繰り返し幾十回、幾
 百回も起こったことでした。

しかし、私は心の狭さ故に気付かないことが多々あり
 ました。私たちは前に立ち足はだかる壁が大きく険しく、
 まるでその壁を乗り越えることが絶望的に困難に思える
 ことがたびたびありました。その時は楽しくプログラム
 を行うことはどうしてもできませんでした。その壁を乗
 り越えるためには自分の能力を超える力をも動員しなけ
 ればなりません。祈る気持ちで、千尋の山から突
 き落とすような覚悟が要りました。そして、奇跡が起こっ
 たのです。子どもたちはその奇跡が起こるかぎり、ど
 んな訓練をも続けることができます。と思います。